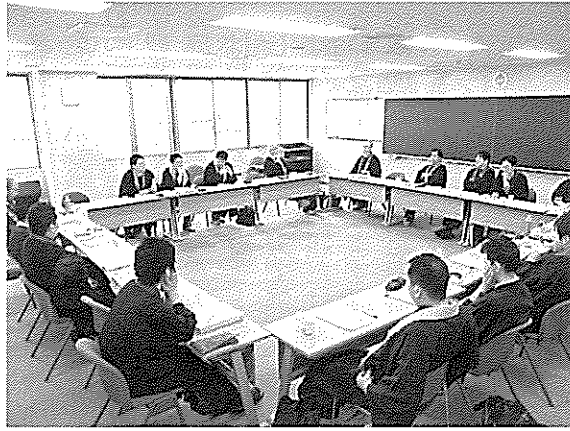


1999
平成11年教化本部の使命と課題の確認
をする教化本部合宿の様子

教化本部発足

教区教化は教区人の手で(中)

二〇一〇年(平成22)12月、教化本部立ち上げの願いを確認し、次代を荷う世代につなげていくことを願った座談会が開催された。

本部発足以前より教区教化に携わった中岡明秀氏は、「これまでの教区教化委員会は、組なら組で割り当てたかたち、あるいは教区会で何名というかたちですから、教区の現実、自分のお寺での課題、こういうことが問題なのだと思うている、本当にやっつけていこうとする人たちが教化委員会に入ることができないということが教化本部を立ち上げていく願いとしてあった」と、組織上の課題点を指摘する。

教化本部を規定する現行の「北海道教区教化委員会規程」は、教区教化委員長を教務所長としつつ、教区教化を円滑に推進するために委員会内に「教化本部」を置いている。これまで別々であった企画立案と教化事業の実施を、教化本部に一本化するというものである。

教化本部を代表する教化本部長は、地区・組・別院の教化委員長による選定会議によって選定し、教区会・教区門徒会の承認を必要とする。いわば教区の総意をもって

教区教化を託していく手続きを踏んでいる。

これに対して本部員・実行委員は、教区教化委員長の任命としつつ、人選は教化本部長が行うと規定した。

*

北海道教区では教化本部に先立つて、寺の現場で動く若手僧侶10名が教区教化に参画する「青少年教化要員」が機能していた。教化要員は、教務所長と青少年指導主任の裁量で選定されていたという。

青少年教化要員であった伊藤篤氏は、「当時の教務所長から、青少年教化要員を作ったのは、会議のため、企画のためではない。実行のためでもないのだと。たった一つ、自分のお寺の青少年教化がどうなっているのか。そのことを点検して自分のお寺の中に青少年教化の活動の芽を作る、それが青少年教化要員の仕事なのだということを言われました。私たちはどうも教区のところ、私たちが呼ばれたら会議を開いて何をするのかを相談し、そしてその実行に向けて準備すると思っ描いていまして。ところが、自分の身を置いている現場を青少年教化の現場にしているかと。そういうことを言われて、そうか、自分たちが子ども会を作るといふことなのだと思を覚まされた」と当時を振り返る。

教区教化は自坊で何をやってい

いのか分からず、日常の法務に埋没していく状況に、一つの道を開いていく役割を果たしてきた。それは同時に人の発掘でもあった。教化本部の人選はこの流れを背景としている。

*

一九九九年(平成11)、教化本部が発足し、本部員・実行委員が選定されると、教区内から教化に関わる一部の人間でセクト化するのではないかとの疑念が抱かれた。特に選定から漏れた組からの反動は強かったという。

この状況を打破すべく、別組織であった靖国協議会と「同和」協議会を発展的に解消し、すべての組・別院が参画する教化本部「社会教化部門」の研究部会として再構成された。しかし、組・別院の推薦による参画は、主体的な意志を維持し続けることが難しいという問題ももたらした。

現在、組・別院の各教化委員会と連携し、社会教化部門での学びをそれぞれの場で報告することや、組の社会教化研修に各研究部会が参加する態勢をとっていくことも計画されている。

教化本部発足の願いを継承することは、不変の組織機構を作り上げることではない。「休息」することなく、柔軟に変わり続けることにおいて願いは持ち続けられていく。(つづく)